

緑化樹木の苗木養成法

—— 実生，無性繁殖の技術（3） ——

齋藤 晶 佐藤 孝夫

光珠内季報 No. 50 に引続き紹介する。

樹種ごとの繁殖方法

29 ツリバナ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は7月，種子の採取時期9～10月，ほぼ隔年に結実の傾向がある。

〔採取・貯蔵〕 ニシキギに準ずる。精選種子1kg当り19,800粒（18,600～21,000粒）。

〔まきつけ・床替〕 発芽率35%（15～55%），種子の取り扱いにニシキギに準ずる。まきつけ量50g/m²，発芽はまきつけ当年10%，翌年29%，翌々年61%。発芽本数346本/m²，得苗数300本/m²，1-0苗の平均苗高8cm（4～12cm），まきつけ床で1年据置する（写真-1）。床替は80本/m²前後に，2-1苗の平均苗高20cm（15～25cm）。

育苗上の要点

採取時期の遅れや種子が乾燥すると，発芽しにくくなる。まきつけ・床替床とも，有機質肥料を多めに施す。

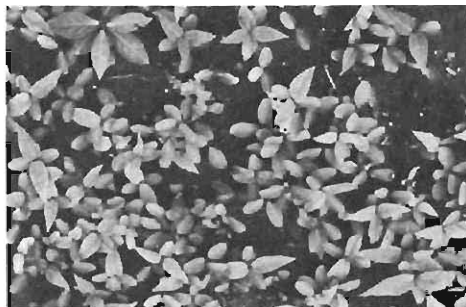


写真-1 ツリバナの発芽（5箇月目）

30 マユミ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 雌雄異株，開花は5～6月，種子の採取時期10～11月，隔年結果の傾向が少ない。

〔採種・貯蔵〕 さく果の裂開直前に採取し，3～4日浸水後，手でもんで果皮・仮種皮を水洗除去する（写真-2）。種子は乾燥すると発芽率が低下するので保湿低温貯蔵する。精選種



写真-2 マユミの結実（採取直前）

子1kg 当り 21,500 粒 (19,000 - 24,000 粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率 35% (20 - 50%) , とりまき, 春まきともよく発芽する。まきつけに先立って7 - 8日浸水する。まきつけ量 50 g/m² , 発芽はまきつけ当年 27% , 翌年 50% , 翌々年 23% 。発芽本数 376 本/m² , 得苗数 300 本/m² , 1 - 0 苗の平均苗高 10 cm (8 - 12 cm) 。生長が緩慢であるため, まきつけ床で1年掘置する。床替は 40 本/m² 前後に, 2 - 1 苗の平均苗高は 18 cm (13 - 23 cm) 。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽しにくくなるため, 芽が出揃うまでに床面に種子が露出している場合は, 再度覆土を行う。

31 ツルウメモドキ

繁殖方法 実生, さし木

実生

〔結実特性〕 雌雄異株, 開花は5 - 6月, 種子の採取時期 10月下旬 - 11月上旬, 隔年結果の傾向はみられない。

〔採種・貯蔵〕 さく果が裂開する直前に採取し, 2 - 3日陰干後, 脱粒する。種子は仮種皮で覆われているため, 2 - 3日浸水後水洗除去し, 陰干して保湿低温貯蔵する。精選種子 1kg 当り 67,500 粒 (62,000 - 73,000 粒) 。

〔まきつけ・床替〕 発芽率 75% (65 - 85%) , まきつけ量 12 g/m² , 5月中旬にまきつけると下旬に発芽する (写真-3) 。発芽本数 607 本/m² , 得苗数 300 本/m² , 1 - 0 苗の平均苗高 40 cm (30 - 50 cm) 。床替は 20 本/m² 前後に, 1 - 1 苗の平均苗高 70 cm (60 - 80cm) 。

さし木

〔採種・穂作り〕 2月中旬, 充実した前年伸長枝を選び, 採取し雪中埋蔵する。穂木の長さは 10 - 15 cm , 基部を斜めに削り, 切り返しをつける。

〔さしつけ〕 春ざしがよい。さしつけは 200 本/m² 前後, 用土はあまり吟味しない。直接育苗畑にさしつけても 90% 以上発根する。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽しにくくなる。まきつけ床の乾燥を防ぐため, 敷藁を多めに施す。病虫害の発生は少ない。

さし穂は先端の細い部分を切除し, 充実した太い枝をもちいる。

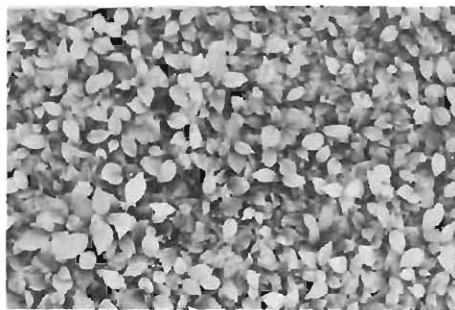


写真-3 ツルウメモドキの発芽 (3箇月目)

32 アキグミ

繁殖方法 実生，さし木

実生

〔結実特性〕 樹形は直立形と匍ふく形がある。開花は5月，果実の熟期10～11月，隔年結果の傾向はみられない。

〔採種・貯蔵〕 紅熟した果実を採取し，手でもんで果肉を水洗除去する。1～2日陰干し保湿低温貯蔵する。精選種子1kg当り59,000粒(31,000～87,000粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率60%(50～70%)，とりまき，春まきともよく発芽する(写真-4)。まきつけ量15g/m²，発芽はまきつけ当年。発芽本数531本/m²，得苗数250本/m²，1-0苗の平均苗高30cm(25～35cm)。床替は30本/m²前後に，1-1苗の平均苗高50cm(40～60cm)。

さし木

〔採穂・穂作り〕 7月下旬～8月上旬，充実した当年伸長枝の中から太めの緑枝を採取し，先端の細い部分を切除する。穂木の長さは10～15cm，基部を斜に削り，葉を2～3枚残す。

〔さしつけ〕 さしつけは50本/m²前後，鹿沼土および火山砂の用土では78%以上発根する。

育苗上の要点

発芽は容易で，10月中旬頃とりまきすると大部分の種子は下旬に発芽し，霜や雪の被害をうけることがあるので春にまきつける。生長が旺盛なため，早めに間引を行う。病虫害の発生は少ない。

さし木は緑枝・休眠枝ざしとも発根率が高く，休眠枝ざしでは発根後の生長が旺盛である。

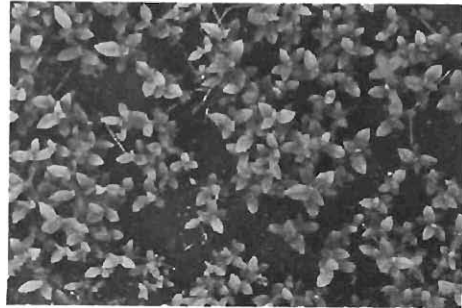


写真-4 アキグミの発芽(3箇月目)

33 ノリウツギ

繁殖方法 実生，さし木

実生

〔結実特性〕 開花は7～8月，種子の採取時期10月，隔年結果の傾向はみられない。

〔採取・貯蔵〕 枝の先端に穂状についているさく果を小枝ごと採取する。6～8日天日乾燥して種子をふるいだし，密封低温貯蔵する。精選種子1g当り9,950粒(9,300～10,600粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率7%(5～10%)。とりまき，春まきとも同様に発芽する(写真-5)。まきつけ量3g/m²，発芽はまきつけ当年。発芽本数696本/m²，得苗数400本/m²，1-0苗の平均苗高10cm(8～12cm)。床替は40本/m²前後に，1-1苗の平均苗高40cm

(30～50 cm)。

さし木

〔採穫・穂作り〕 7月下旬～8月上旬、充実した当年伸長枝を採取する。穂木の長さ15～20 cm、基部を斜めに削り、切り返しをつけ、葉を2～3枚残して半切りする。

〔さしつけ〕 さしつけは150本/m²前後、用土に鹿沼土および火山砂をもちいると82%以上発根する。

育苗上の要点

種子が微細なため、厚まきや、まきむらがないよう、増量剤を混合してまきつける。密生すると立枯病が発生しやすく、早めに間引する。生長にバラツキが多いため、床替は根および幹枝を3～5 cm程、切りつめて行くと活着がよく、揃った苗木を得ることができる。サビ病の発生がみられるので、7～8月に殺菌剤を散布する。

さし木は発根後、日覆を取り除くと生長がよくなる。

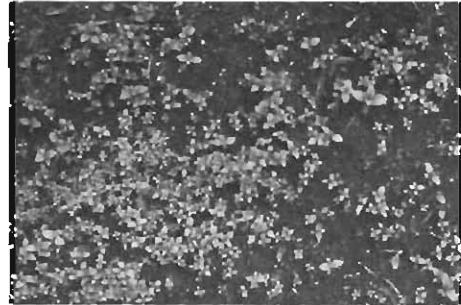


写真-5 ノリウツギの発芽 (3箇月目)

34 オオバボダイジュ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は7～8月、種子の採取時期10月、隔年結果の傾向がつよい。

〔採取・貯蔵〕 果実が褐変し始めたころ採取し、5～6日陰干する。果皮の裂開後、脱粒する。種子の表面は仮種皮で覆われているので布袋などに入れ、摩擦し除去する。乾燥すると発芽率が低下するので保湿低温貯蔵する。精選種子1 kg 当り65,500粒(52,000～79,000粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率20%(10～40%)、とりまき、春まきとも同様に発芽する(写真-6)。まきつけに先立って4～6日浸水する。まきつけ量40 g/m²、発芽はまきつけ当年20%、翌年65%、翌々年15%。発芽本数524本/m²、得苗数250本/m²、1-0苗の平均苗高15 cm(8～22 cm)。床替は40本/m²、まきつけ床の中から大きいものを選び順次行う。1-1苗の平均苗高30 cm(25～35 cm)。

育苗上の要点

種子は小鳥の被害をうけやすく、まきつけ床の上に防鳥テープを張る。床替床は日当りのよい場所を選び、有機質肥料を多めに施す。苗木にはサビ病が発生しやすいので、7～8月に殺菌剤を散布する。

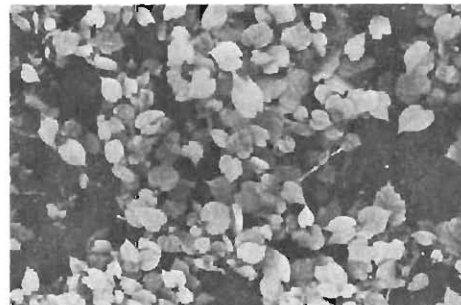


写真-6 オオバボダイジュの発芽 (5箇月目)

繁殖方法 実生、つぎ木

実生

〔結実特性〕 雌雄異株、開葉は5月、種子の採取時期10月、隔年結果の傾向がある。

〔採取・貯蔵〕 さく果が黄褐変し始めたころ採取する。7～8日陰干すると裂開するので、中から種子をふるいだし、風選する。室内で3～4日乾燥後、密封して冷暗所または低温貯蔵する。精選種子1g当り1,700粒(1,500～1,900粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率18%(10～27%)。とりまき、春まきとも同様に発芽する(写真-7)。まきつけ量3g/m²、発芽はまきつけ当年72%、翌年28%。発芽本数918本/m²、得苗数500本/m²、1-0苗の平均苗高25cm(18～32cm)。床替は30本/m²前後に、1-1苗の平均苗高35cm(28～42cm)。

つぎ木

〔採穂・貯蔵〕 つぎ穂は充実した前年伸長枝を2月中旬に採取し直ちに雪中埋蔵する。

〔つぎ木〕 台木は同種の据置苗をもちいる。つぎ木の適期は5月中旬。台木を地面から高さ15～20cmで切断する。穂木は長さ5～8cm(2～3芽つける)に切り、下方を鋭利な小刀で楔状に削り、割りつぎする。つぎ木後は乾燥を防ぐため日覆を施す。活着率68%(40～75%)。

育苗上の要点

覆土は薄めにする。種子は微粒であり厚まきやまきむらができないよう、増量剤を混合してまきつける。間引は早めに行い、日覆は9月上旬ころ取り除く。

つぎ木はシダレカツラを増殖する場合に行う(写真-8)。



写真-7 カツラの発芽(3箇月目)



写真-8 シダレカツラのつぎ木
(9月下旬の状況)

36 イタヤカエデ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は5月、種子の採取時期9～10月、隔年結果の傾向は少ない。

〔採取・貯蔵〕 翅果が褐変し始めたころ、やや早めに採取する。3～4日陰干後、布袋に入れ手でもみ翅を風選除去する。種子は乾燥すると発芽率が低下するため土中埋蔵する。精選種子1kg当り42,500粒(31,000～54,000粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率37%(30～45%)、とりまき、春まきともよく発芽する。まきつけ量40g/m²、発芽はまきつけ当年、発芽本数629本/m²、得苗数280本/m²、1-0苗の平均苗高20cm(10～30cm)。床替は40本/m²前後に(写真-9)、1-1苗の平均苗高35cm(25～45cm)。

育苗上の要点

種子が乾燥すると、発芽はまきつけ翌年となる。過密に成立するとウドンコ病が発生する。まきつけ・床替床とも有機質肥料を多めに施す。



写真-9 イタヤカエデの床替
(1-1苗)

37 ハウチワカエデ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は5月、種子の採取時期9～10月、隔年結果の傾向はあまりみられない。

〔採取・貯蔵〕 イタヤカエデに準ずる(写真-10)。精選種子1kg当り33,500粒(29,000～38,000粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率27%(18～36%)。とりまき、春まきとも同様に発芽する。まきつけに先立って3～4日浸水する。まきつけ量40g/m²、覆土、敷藁を厚めに施す。発芽はまきつけ当年18%、翌年60%、翌々年16%。発芽本数361本/m²、得苗数200本/m²、発芽当年の1-0苗の平均苗高10cm(5～15cm)。床替はまきつけ床の中から大きいものを選び順次行う。40本/m²前後、1-1苗の平均苗高25cm(18～32cm)。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽率が低下する。精選後



写真-10 ハウチワカエデの結実(採取直前)

は直ちに土中埋蔵および保湿低温貯蔵する。芽が出揃うまでに2～3年かかる。翌春、床面に未発芽の種子が露出している場合は再度覆土を行う。

38 ハルニレ

繁殖方法 実生、さし木

実生

〔結実特性〕 開花は4～5月、種子の採取時期6月上旬、隔年結果の傾向がある。

〔採取・貯蔵〕 翅果が薄褐色し始めたころ、小枝をしごいて採取する（写真－11）。1～2日陰干し、夾雑物を除去する。発芽はとりまきが最もよい。精選種子1kg当り87,000粒（76,000～98,000粒）。

〔まきつけ・床替〕 6月中旬とりまきすると、下旬～7月上旬にかけて発芽する。発芽率39%（20～58%）。まきつけ量45g/m²、覆土は薄めにする。発芽本数1,526本/m²、得苗数340本/m²、1～0苗の平均苗高25cm（10～40cm）。床替は30本/m²前後、1～1苗の平均苗高90cm（60～120cm）。

さし木

〔採穂・穂作り〕 7月下旬～8月上旬にかけ、充実した当年伸長枝を選び採取する。先端の細い部分を切除し、長さは10～15cmに切り揃える。基部を斜めに削り、葉を1/2取り除き、基部を4～5時間浸水する。

〔さしつけ〕 用土は鹿沼土および火山砂がよい。さしつけ本数は200本/m²前後、密閉法によると55%以上発根する。

育苗上の要点

種子は乾燥したり、保存期間が長びくと発芽率が低下する。また、凶作年の種子は充実度が低い傾向がみられる。まきつけ・床替床とも有機質肥料を多めに施す。覆土は薄めにし、発芽

時は土壌が乾燥するため厚めの日覆をかけ、9月中旬以降は取り除く。さし木は発根当年生長が旺盛であり、10月上旬ころ密閉施設を取り除き、外気をあてる。



写真－11 ハルニレの結実（採取直前）

39 トチノキ

繁殖方法 実生、つぎ木

実生

〔結実特性〕 開花は5～6月、種子は大粒で直径2.5～3.2cm、採取時期9～10月、隔年結果の傾向がある。

〔採種・貯蔵〕 さく果が裂開し始めたころ、落下直後の果実を拾い集めるか、樹上でもぎとり、脱粒する。殻果にはゾウリムシ類の侵入がみられるため、二硫化炭素でくん蒸か、もしくは2～3日浸水して殺虫する。種子は乾燥すると発芽しない。このため、脱粒後直ちに水分を15%ほど含ませた鋸屑の中に種子を混ぜ、保湿低温貯蔵する。精選種子1kg当り143粒(120～167粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率95%(90～100%)。まきつけ量は800g/m²、約114粒。座を横に向け、種子を床土の中に埋め込むようにして点状にまきつけ覆土する。5月中旬ころまきつけると、下旬に発芽する(写真-12)。発芽本数、得苗数とも108本/m²、1-0苗の平均苗高30cm(25～35cm)。床替は根を15cm程切りつめ、25本/m²前後、1-1苗の平均苗高85cm(60～110cm)。

つぎ木

〔採穂・貯蔵〕 つぎ穂は充実した前年伸長枝を2月中旬に採取し、直ちに雪中埋蔵する。

〔つぎ木〕 台木は同種の床替苗、掘置き苗をもちいる。つぎ木の適期は5月下旬～6月上旬、台木を地面から15～20cmの高さで切断し、貯蔵しておいた穂木を長さ10～15cm、2～3芽つけて切断し、楔形に削って割りつぎする。なお、穂木は頂芽をつけた枝の先端をもちいると活着後の生長がよい。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽しない。土中埋蔵を行うと腐敗することが多い。育苗は容易である。つぎ木はベニバナトチノキなど(写真-13)の増殖にもちい、活着は容易である。

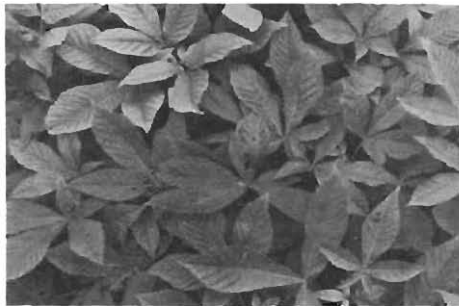


写真-12 トチノキの発芽(3箇月目)



写真-13 ベニバナトチノキのつぎ木(約1箇月)

40 シラカンバ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は4～5月、種子の採取時期9～10月、隔年結果の傾向はみられない。

〔採種・貯蔵〕 翅果（穂）が褐変し始めたころ、早めに採取する（写真-14）。5～7日陰干し、手でもんで脱粒し、紙・布袋に入れ、密封低温貯蔵する。精選種子1g当り1,400粒（1,200～1,600粒）。

〔まきつけ・床替〕 発芽率10%（5～15%）、種子には翼があり、微風でも飛散しやすいため、砂を混合してまきむらがないようにする。まきつけ量3g/m²、5月中旬にまきつけると、下旬～6月上旬に発芽する。発芽本数420本/m²、得苗数280本/m²、1-0苗の平均苗高40cm（15～65cm）。床替は30本/m²前後、1-1苗の平均苗高95cm（60～130cm）。

育苗上の要点

覆土ま種子が見えかくれする程度敷藁を厚めに施し、間引は早めに行う。9月中旬ころ日覆を取り除く。発芽初期に立枯病、褐斑病、また8～9月にかけて食葉害虫の発生がみられるので殺菌剤および殺虫剤を散布して防除する。

41 ミズキ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は5～6月、果実の熟期10～11月、隔年結果の傾向が多い。

〔採種・貯蔵〕 果実が黒変し始めたら早めに採取して、3～4日浸水し、手でもんで果肉を水洗除去する（写真16）。種子は乾燥すると発芽率が低下するため保湿低温貯蔵する。精選種子1kg当り25,000粒（21,000～29,000粒）。

〔まきつけ・床替〕 発芽率50%（30～70%）、とりまき、春まきともよく発芽する。発芽はまきつけ当年10%、翌年90%。まきつけ量20g/m²。発芽本数250本/m²、得苗数200本/m²、1-0苗の平均苗高45cm（30～60cm）。床替は30本/m²前後に、1-1苗の平均苗高80cm（65～95cm）。

育苗上の要点

種子を乾燥させると発芽が1年遅れる。床替は根を1/3程切りつめて行う。

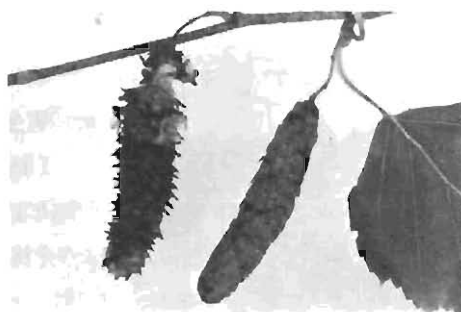


写真-13 シラカンバの結実（採取直前）

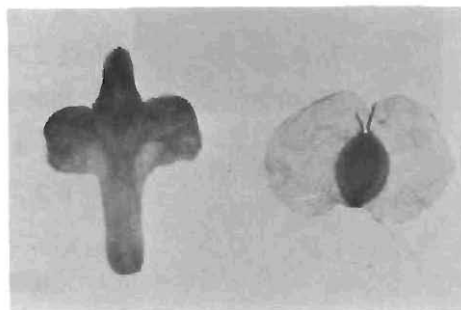


写真-15 シラカンバの種子と果鱗

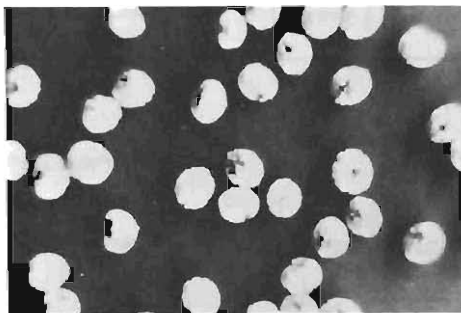


写真-16 ミズキの種子（精選）

42 キタコブシ

繁殖方法 実生、つぎ木

実生

〔結実特性〕 開花は4月、種子の採取時期9～10月、隔年結果の傾向がある。

〔採種・貯蔵〕 袋果が裂開し始めたころ、果叢ごと採取する。3～4日陰干して脱粒し、2～3日浸水後、手でもんで仮種子を水洗除去する。種子は乾燥すると、芽が出揃うまでに2～3年かかる。精選後、直ちに保湿低温貯蔵を2月ころまで行い、その後、5月上旬まで雪中埋蔵する精選種子1kg当り2,300粒(1,900～2,700粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率50%(20～80%)、とりまき、春まきともよく発芽する(写真-17)。雪中貯蔵



写真-17 キタコブシの発芽
(5箇月目)

樹種別の種子粒数および養成一覽表

No	科	樹種名	精選種子1kg	実		
				まきつけ量		発芽型 年
				g/m ²	粒数/m ²	
29	ニシキギ	ツリバナ	19,800	50	990	多
30		マユミ	21,500	50	1,075	多
31		ツルウメドキ	67,500	12	810	1
32	グミ	アキグミ	59,000	15	885	1
33	ユキノシタ	ノリウツギ	(9,550)	3	29,850	1
34	シナノキ	オオバボダイジュ	65,500	40	2,620	多
35	カツラ	カツラ	(1,700)	3	5,100	1
36	カエデ	イタヤカエデ	42,500	40	1,700	1
37		ハウチワカエデ	33,500	40	1,340	多
38	ニレ	ハルニレ	87,000	45	3,915	1
39	トチノキ	トチノキ	143	800	114	1
40	カバノキ	シラカンバ	(1,400)	3	4,200	1
41	ミズキ	ミズキ	25,000	20	500	多
42	モクレン	キタコブシ	2,300	500	1,150	多
43		ホオノキ	2,250	500	1,125	多
44	エゴノキ	ハクウンボク	2,000	600	1,200	多
45	ブナ	ブナ	7,300	200	1,460	1

を行った種子の発芽は、まきつけ当年 87 %、翌年 13 %。まきつけ量 500 g/m²、覆土・敷藁を厚めに施す。発芽本数 575 本/m²、得苗数 200 本/m²、1 - 0 苗の平均苗高 25 cm (20 ~ 30cm)。床替は 30 本前後、1 - 1 苗の平均苗高 40 cm (30 ~ 50 cm)。

つぎ木

〔採穂・貯蔵〕 つぎ穂は充実した前年伸長枝を 2 月中旬ころ採取し、雪中埋蔵する。

〔つぎ木〕 台木は同種の据置苗を用いる。つぎ木の適期は 5 月下旬、台木を地面から 15 ~ 20 cm の高さで切断する。穂木を長さ 10 ~ 15 cm に切り、下方を斜めに削り切り返しをつけ、切りつぎする。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽しにくく、とりまきを行っても芽が出揃うまでに 2 年以上かかる。また、土中埋蔵では種子が腐敗しやすい。葉は大型であり、まきつけ床が過密にならないよう適宜間引する。

つぎ木はヒメコブシなどの増殖にもちいる。

生 繁 殖				無 性 繁 殖				
平均発芽率 %	発 芽 数 本/m ²	得 苗 数 本/m ²	平均苗高 cm	1 回 床 替		さし木	つぎ木	とり木
				本/m ²	平均苗高			
35	346	300	8	80	20			
35	376	300	10	40	18			
75	607	300	40	20	70	○		
60	531	250	30	30	50	○		
7	696	400	10	40	40	○		
20	524	250	15	40	30			
18	918	500	25	30	35		○	
37	629	280	20	40	35			
27	361	200	10	40	25			
39	1,526	340	25	30	90	○		
95	108	108	30	25	85		○	
10	4,200	280	40	30	95			
50	250	200	45	30	80			
50	575	200	25	30	40		○	
35	393	180	20	30	40			
60	720	250	35	30	40			
52	759	300	15	40	30			

43 ホオノキ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は5～6月、種子の採取時期9～10月、隔年結果の傾向がよい。

〔採種・貯蔵〕 袋果が裂開する直前に果叢ごと採取する(写真-18)。3～4日陰干して脱粒し2～3日浸水後、手でもんで仮種皮を水洗除去する。種子は乾燥すると発芽率が低下するので、精選後は直ちに保湿低温貯蔵する。精選種子1kg当り2,252粒(1,900～3,200粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率35%(18～52%)。とりまき、春まきともよく発芽する。保湿低温貯蔵と雪中埋蔵を組合せた種子の発芽は、まきつけ当年86%、翌年14%。まきつけ量500g/m²、覆土・敷藁を多めに施す。発芽本数393本/m²、得苗数180本/m²、1-0苗の平均苗高20cm(14～26cm)。床替は根を1/3程切りつめ、30本/m²前後に、1-1苗の平均苗高40cm(30～50cm)。

育苗上の要点

種子を乾燥させると発芽が遅れる。土中埋蔵は種子の腐敗が多い。苗木の葉はキタコブシよりも大きく、まきつけ床が過密にならないよう適宜間引する。まきつけ・床替床とも有機質肥料を多めに施す。



写真-18 ホオノキの袋果
(精選直前)

44 ハクウンボク

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は5～6月、種子の採取時期9月下旬～10月上旬、隔年結果の傾向がある。

〔採種・貯蔵〕 さく果が灰褐変し始めたころ果房ごと採取する(写真-19)。3～4日陰干して、裂開した果皮を除去し脱粒する。種子は乾燥すると発芽しにくくなるため、水分を含ませた鋸屑に混合して保湿低温貯蔵する。精選種子1kg当り2,000粒(1,700～2,300粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率60%(40～80%)、とりまき、春まきともよく発芽する。まきつけに先立ち2～3日浸水する。まきつけ量600g/m²、覆土と敷藁を厚めに施す。発芽はまきつけ当年24%、翌年76%。発芽本数720本/m²、得苗数250本/m²、1-0苗の平均苗高35



写真-19 ハクウンボクの結実(採取直前)

cm (25 ~ 45 cm)。床替は根を 1/3 程切りつめ、30 本/m² 前後、1 - 1 苗の平均苗高 40 cm (20 ~ 60 cm)。

育苗上の要点

種子は乾燥すると発芽が遅れる。種子は比較的大粒であり、まきつけ翌春、床面に未発芽の種子が露出している場合は再度覆土を行う。まきつけ・床替床とも有機質肥料を多めに施す。床替は細根が少ないため、活着がややや困難である。

45 ブナ

繁殖方法 実生

〔結実特性〕 開花は 5 月、種子の採取時期 10 月、隔年結果の傾向がある。

〔採取・貯蔵〕 自然落下した種子にはゾウムシ類の侵入が多い。総苞が漂樹変し始めたころ早めに採取し、3 - 4 日天日乾燥する。裂開した果皮を除去し脱粒する。シイナが多く含まれるため水選する。種子は乾燥すると発芽率が低下するため、水分を含ませた鋸屑に混合し、保湿低温貯蔵する。精選種子 1 kg 当り 7,300 粒(6,600 ~ 8,000 粒)。

〔まきつけ・床替〕 発芽率 52 % (32 ~ 72 %)、まきつけに先立って 2 ~ 3 日浸水する。まきつけ量 200 g/m²、5 月中旬まきつけると下旬に発芽する(写真 - 20)。発芽本数 759 本/m²、得苗数 300/m²、1 - 0 苗の平均苗高 15 cm (10 ~ 20 cm)。床替は 40 本/m² 前後、1 - 1 苗の平均苗高 30 cm (18 ~ 42 cm)。

育苗上の要点

種子は小鳥の好物であり、食害を防ぐためまきつけ床の上に防鳥テープを張る。床替は根を 1/3 ほど切りつめる。

おわりに

これまで 3 回にわたって緑化樹としても用いられている道産樹種 45 種の苗木養成技術を紹介してきた。今後とも引続き道内の山野に天然分布する樹種の苗木養成試験をおこなっていく予定である。

(樹芸樹木科)



写真-20 ブナの発芽
(約 150 日目)